

志向性と歴史性

—フッサールにおける志向的意識の歴史内在性—

梶 尾 悠 史 奈良教育大学社会科教育講座 (哲学・倫理学)

Intentionality and Historicity:

On the Historical Immanence of Intentional Consciousness in Husserl

Yushi KAJIO

(Department of Philosophy, Nara University of Education)

Abstract

There are two standpoints in Husserl's phenomenology: subjectivism and historicism. According to Husserl's subjectivism, things are constituted by an act of consciousness. For example, a desk is constituted (perceived) only if some appearances are regarded as the manner in which the desk is given to consciousness. The same explanation applies to ideal objects. For instance, the number "5" is constituted (known) only if a subject regards a certain representation of a group (such as a group of apples) as the manner in which "5" is given. However, Husserl also emphasizes the historical structure of knowledge of ideal objects. From this perspective, ideal objects are thought to have a public nature in the sense that they are possessed by humankind before being known by each subject. Thus, it is clear that the range of this historical interest is not entirely contained in that of the subjective one.

We must ask how these two standpoints relate to each other in Husserl's phenomenology. We confront a serious discrepancy between subjectivism and historicism, especially when we identify the former with "non-historical apriorism" because of the following idea: the evidence of knowledge is found only in individual subjects who actually recognize it. It is true that this kind of apriorism is incompatible with historicism, which focuses on the intersubjective aspect of our knowledge.

I do not interpret Husserl's phenomenology as an apriorism in the above sense. The purpose of this paper is to examine the historical or intersubjective aspect of the theory of constitution and to suggest a consistent understanding of Husserl's phenomenology. For this purpose, I want to clear the historical immanence of intentional consciousness by referring to Husserl's *Origin of Geometry*.

キーワード：現象学，フッサール，歴史性

Key Words : Phenomenology, Husserl, Historicity

1. はじめに

現象学者フッサールは、理念性について、一貫して主観にとっての所与の様式の一つとして語っている。しかし理念的対象の認識をめぐる、フッサール現象学は二つの異なる見解の対立を生み出しているように見える。それは主観主義と歴史主義の対立である。

主観主義に立てば、数5のような数学的対象さえも、主観による構成の成果とみなされる。この点で、目の前にある机のような知覚対象と理念的対象の間に違いはな

い。事物としての机を知覚することは、もろもろの感性的所与（射映）を机という意味に向けて統握することと一体的になされる。同じように、主観にとって数5を理解する唯一の方法は、具体的な集合表象を数5の「与えられ方」として統握することである。こうして一人称主観への与えられ方に関心を制限することによって、現象学は、主観にとっての〈体験-統握〉可能性の外部について想定することを、注意深く回避する。

他方で、フッサールは『危機』書や『幾何学の起源』において、歴史主義と呼べる見地に立って、理念的対象

が認識にもたらされる過程の歴史的な構造を論じている。理念的対象には、個人の認識活動に先立って人類に共有されているという意味で公共性という様態が予め刻み込まれているというのである。公共性に着目するとき、主観主義と歴史主義の対立が看過できない難問としてわれわれに迫ってくる。というのも、歴史主義の見地から開かれる研究領域は、明らかに主観の体験可能性を大きく超えているからである。

主観主義に「無歴史的アプリオリズム」⁽¹⁾という評価が帰される時、上の二つの見解の齟齬はいよいよ深刻なものとなる。このような評価が下される要因は、〈知識の明証性は実際に認識している個別の主観のうちにのみ見出される〉という考えを、主観主義が擁護しているように見えるからであろう。たしかに、この種のアプリオリズムは、知の共同体としての人類の地平に焦点を当てる歴史主義と対立する。そして、フッサールは晩年にいたるまでこのアプリオリズムを乗り越えることができなかった、という見解が今なお大勢を占めている。このような見解は、フッサールの直弟子であるラントグレーベによる以下の記述の中に既に現れている。

「認識の究極的な基礎づけに向かう「理論的」な自我と、「実践的」な、つまり自由で倫理的な自我とのあいだに、満足のいく仕方で連関を樹立することに——彼の努力はその方向をめざしているにもかかわらず——フッサールは成功していないのである。」⁽²⁾

この言葉から見て取れるのは、『イデー I』等で展開された志向性理論と『危機』書をはじめとする晩年の論考の間に結びつきが認められない、という不満である。理論的な認識に立脚してそのアプリオリな構造を解明しようとする前者と違って、後者はむしろ実践的な主体の歴史性という存在性格に焦点を当てる。したがって両者の問題関心は、大きくかけ離れているように見える。

従来、「歴史性」はフッサールの晩年のテーマとみなされ、主に『危機』書と結びつけて論じられてきた。そのため、フッサール現象学において志向性と歴史性という二つのテーマがどう関係しあっているのかについて、十分な検討がなされてこなかった。本稿では、このような問題意識のもと、超越論的現象学そのものをもつ歴史性の視角を別出し、理論的自我と実践的自我を結びつける統一的なフッサール像を与えたい⁽³⁾。

2. 現実性と個体化の原理

——『経験と判断』の存在論

フッサールにとって認識を論じる際の議論の枠組みの

一つは、意味と対象の関係を考察する「意味の理論」である。なおかつ、しばしば個別の状況を考慮した語用論の観点から、意味の構造が論じられてもいる。この観点において意味は、志向の対象にたいする意識の定立的な構え（信念様相）に即して論じられる。対象がどの程度の直観様態のもとで与えられるのかという状況の違いに応じて、当該の対象について思念される諸々の意味の性格（存在様相）も多様に変化する。また、ある意味が真として思念されるのは、それ自身を含んだ多様な意味との間で「原的かつ十全的」なネットワークが作り出される状況においてであり、このネットワークの全体的な思念によって認識が成り立つとされる⁽⁴⁾。認識は、意識（ないし意味）と対象の一回的な合致というより、むしろ、さまざまな意味を直観的な様態において総合する個体化の運動の成果と見なされるべきである。

『経験と判断』第36–40節でなされる個体化についての議論は、『イデー I』の対象構成の議論を引き継いでいる。その一方で、議論の強調点が密かに移し置かれていることを見逃してはならない。それぞれの強調点の違いとは、ほかでもない、同一化の原理と言うときの、まさにその「原理」をどこに求めるかに関する相違である。『イデー I』の志向性理論は、体験現出の具体的な内容（規定）がことごとく捨象された「純然たる X」ないし「〔諸規定の〕担い手」という実体概念をなお堅持しており、この実体によって志向の対象の個性性を保証していた⁽⁵⁾。これに対して『経験と判断』では、主観にとっての「現実」という文脈の同一平面が、個体化の原理として重要視されている⁽⁶⁾。現実とは、さまざまな現出が体験的に与えられるところの、そして、それらの現出が意味付与を受けて特定の内容として主観に保持されるところの、単独のこの世界である。

さらに、体験可能性という意味での現実性の原理が「時間意識」に求められている点を踏まえれば、次のようにまとめることができる。内的時間意識において調和的、継起的に与えられることが、対象を同一的なものとして認識するための条件（個体化の原理）である⁽⁷⁾。この条件を満たすときに限り、諸現出に付与される個別の意味が通時的に総合されるとともに、それらの意味を含蓄する類型的意味が対象の解釈枠として構成される。『経験と判断』のフッサールは、個体の最もプリミティブな存在形式を「純然たる X」や「諸規定の担い手」といった抽象的な基体に求めない。この著作において個体化の原理と見定められるのは、同一の文脈において一定の時間位置をもって調和的に継起する現出内容の「ゲシュタルト整合性」⁽⁸⁾なのである。

注目すべきは、『経験と判断』においてフッサールが「基体」という古くからの概念を使用している点である⁽⁹⁾。だがフッサールの真意は、この伝統的な概念を流用する

ことによって、自身が企てる思想上の転回を印象づけることにあったはずだ。実際、基体は「類型」によって置き換えられ、さらに、対象を知覚する際の〈文化－負荷的〉な解釈枠という機能が与えられることになる。そして、「類型」概念を梃子に〈主観的意識から生活世界へ〉という転回が大胆に試みられるのである。だが生活世界論の中身に入っていくことは本論の範囲を超えている。ここでは、同一化においてもたらされる多元的現実という領野について考えていきたい。

『イデー I』において個性は、究極的には、X という抽象的な契機のうち求められた。ちなみに、ここで言う「抽象的」という語には、「非文脈的」「非時間的」「非内容的」等の意味合いが込められている。これに対して『経験と判断』は、個体を文脈的・時間的な相の下に置いて、あくまで内容的に捉えていく。個体という最も単純な契機からして既に、時間の経過を通じて「堆積 Niederschlag」された様々な意味内容の統一体なのであり、類型という意味形象として把握されているのだ⁽¹⁰⁾。

いま見た個体の二面性は、固有名の意味論的機能の二重性と正確に重なる。固有名は固定指示子であって、常にある一つの対象を非記述的な仕方でも指示する、というクリプキ流の考え方がある。『イデー I』の X に負わされた意味論的機能も、このような固定指示子のはたらきとして理解することができる。他方で、固有名とは記述（の束）なのであり、それらの内包を通して外延が同定されるという、ラッセルの考え方がある。『経験と判断』の「類型」はこの意味合いでの固有名に近い。またこの著書の狙いの一つは、経験主観から独立に指示対象を確定できるとされる抽象的な「意味」の概念を解体することであった。それは、いかなる記述を語に付与し、そして記述に応じていかなる対象を語に関係づけるかについて、そのつどの主観の選択の余地を認めるという、語用論の立場からの試みともとれる。

翻ってこの試みは、図らずも「多元的現実」を開示することになる⁽¹¹⁾。この点について以下で考えていきたい。繰り返しになるが、類型とは、**現実世界のこの現在**から切り出された意味付与の通時的堆積の断面であり、その中には過去のさまざまな体験現出が「規定」と呼ばれる記述的な内容の形をとって含蓄されている。すると、特定の類型を現実を選び取ることは、可能世界に属する別の個体を「疑似定立」⁽¹²⁾する想像力を超越論的な条件とする。この想像力は、諸規定のうちの任意のものを自由に変更する（つまり現実の類型の外部から流用する）ことによって個体をさまざまな程度において「仮構する umfingieren」能力である⁽¹³⁾。

だがギュルヴィッチが指摘するように、諸項（諸規定）の連関は意識の主題（類型）を形作るだけでなく、主題が有する地平的背景にまで視野を広げれば「レリバン

シーの領域」としての「主題野」を形作っている⁽¹⁴⁾。だからこそ上の想像力が自覚的に働くとき、われわれは、自らが生きる現実というコンテクストは数多くの限定的な意味領域の中の一つである、ということに気づかされる。もちろん、通常、主観は自身の体験可能性を「至高の現実 paramount reality」⁽¹⁵⁾と感じて生きている。そのような態度は、消極的に捉えれば想像力の停止とも言えるが、この停止の背後において、常に既にある想像的な作用が働いている。それは、おのれの限られた体験をもとに、それらを、他者たちにとっての体験可能性をも含む唯一の現実として統合的に捉える能力である⁽¹⁶⁾。では、どうしてそのようなことが可能となるのか。

3. 体験地平から人類の地平へ

『イデー I』の対象構成の議論では、多元的現実という着想は生じてこない。というのも、この著作の個体化の理論で論じられるのは、脱現実化によって開かれる「可能性」というよりも体験の「潜在性」だからである。つまり、現実（顕在性と潜在性とから成る体験全体）を相対化する視点というものは、ここでは登場する余地がなかったのだ。では『経験と判断』はどうであったか。注目したいのは、個体化に関するダブル・スタンダードともとれるフッサールの語り口である。たとえば、「個体の直観の統一は、根源的な持続の統一と正確に同じ広がりをもつ、つまり**根源的な時間意識**において構成される個別的な持続の統一と正確に同じ広がりをもつ〔強調は引用者〕」⁽¹⁷⁾と言われるとき、〈統一性をもった個体〉と〈時間意識のなかで統一的に持続するもの〉が、少なくとも外延的には同じものと考えられている。ここで言及されているのは、内的時間意識の中での統一であり、「純粋な X」の構成という主観的な水準での同一化作用にはかならない。

だがそのしばらく後で、個体化にとって不可欠な時間とは「主観的な知覚体験の時間ではなく、体験の対象的な意味に共に属している**客観的な時間**なのである」ということが指摘される⁽¹⁸⁾。そして、「客観時間への関係は〔……〕すでに、私にとってだけの存在の領域を超えている」こと、「客観的時間、客観的存在、そして客観的とされる存在者のすべての規定は、私にとってだけでなく、他者たちにとっての存在でもある」ことが強調されるのである⁽¹⁹⁾。ここにおいて、複数の体験地平を内包した一つの現実という『経験と判断』に固有の現実性概念が提出され、同一化作用が相互主観的な水準で理解されるようになるのである。

いまや個体化の原理とされる現実とは、内的時間意識のもとで連合的に形成される〈独我論的地平〉を超えて、「世界時間」によって支配される〈相互主観的地平〉へ

と読み替えられる⁽²⁰⁾。しかし、ここで想起しなければならないのは、同一化そのものはあくまで主観的な作用なのであり——少なくとも『経験と判断』のある段階までは——定立される対象の個性は体験の内的な統一に求められていた、ということである。ならば、いま見た現実性の拡張をどのように理解すればよいのだろうか。考えられる理解の方向は二つある。一つは、明証体験と存在の真理との相関性が否定された結果、個体化の原理が体験の外部に求められるようになったのだ、とする方向である。だがこの見方は、対象の同一性を多様な体験の調和に求めるという現象学に固有の見解と整合しないために、受け入れがたい。もう一つの解釈の方向はこうである。フッサールは依然、明証体験を個体化的直観の「究極の核」⁽²¹⁾とみなしている。その上で、世界への体験の流出（あるいは体験への世界の流入）という事態に彼は注目し始めたのだ。こちらが本論の依って立つ見方である。

『経験と判断』における「現実性」概念の拡張の背後にあるのは、体験地平と世界地平の融合という着想である。しかし、『経験と判断』は事物志向に固執するあまり、融合のダイナミズムを活写するには至らなかった。いまや個体が相互主観的なものとして流通するメカニズムが問題となる。このメカニズムを解明するためには、私たちにとって共通の主題を打ち立てる「主題化」の作用を、歴史的な視角から考察する必要がある。この視角から考察を押し進めたのが『幾何学の起源』の言語論であった。この次第を以下で見えていく。

再びフッサールの存在論に目を向け、あるものの存在が成り立つための不可欠の条件とは何であるかを考えてみよう。個体の同一性と諸内容の統一性の間に次の「恒常的依存」を認めるフッサールの立場は、記述主義とみなされうる。

恒常的依存：必然的に、 a が存在するならば、 a が存在するすべての時点において β が存在する⁽²²⁾。

a がある個体だとすると、 β とは個体の同一性を支える斉一的な諸内容（ノエマ）、もしくは、それらを述定的に表現可能な仕方思念する主観（ノエシス）である。しかし、フッサールは記述主義を採りつつも、それを無歴史主義に賛同するような主観主義に回収しはしない。むしろ、記述を共有する主観どうしの結びつきを明らかにすることによって、志向性と歴史性の統合が図られるのである。このことをさらに確認しよう。

前にも述べたように、対象とは意味付与の堆積の成果なのであり、それは多様な記述を代表する「主題」と言い換えてよいものである。主題にはそれぞれ、自身が位

置づけられるレリバンシー領域に固有の射程がある。たとえば私は、これまでに出会ってきた犬の類型を手がかりにして、初めて目にする犬の個体の歯並びを帰納的に推測することができる⁽²³⁾。このように関心がたかだか経験的一般性（類型）にしか及ばない場合には、主題のレリバンシー領域は私の個人的な「習慣」の範囲内に収まる。他方、関心が普遍的な一般性（理念）、たとえば自然法則や科学理論に向かう場合には、レリバンシー領域は相互主観的な「歴史性」の範囲にまで広がっている。『危機』書においてフッサールが強調する極めて重要な点は、同一の主題をめぐる意味の堆積過程は個人の体験を超えた歴史的なものでありえ、この歴史的過程の根源において当の主題の「原創設 Urstiftung」が「沈澱 Sedimentierung」している、ということである⁽²⁴⁾。もちろん、原創設する主体はこの私ではない。しかし、私はある理念の対象を理解するたびに「精神的父祖」の本源的な明証体験へ遡行し、彼の生み出したその対象をいわば「追行的創設 Nachstiftung」するわけだ⁽²⁵⁾。このような遡行が可能となるのは、私と彼が「開かれた人類の地平」に共存し、同じ世界時間の中を生きているためである⁽²⁶⁾。

以上のことを確認するとき、フッサールは次の「歴史的依存」に注意を向けていると考えられる。

歴史的依存：必然的に、 a が存在するならば、 a が存在し始める時点より先に（またはその時点と同時に） γ が存在する⁽²⁷⁾。

ある個体は、それを主題化する特定の主観（ γ ）が存在して初めて、存在し始めることができる。しかしその個体は、当の主観による一回的な主題化の作用が消え去った後も、依然として存在し続けることができるのである。二種類の存在依存の関係を再度、主題化の観点から検討してみよう。すると以下に掲げる、情報伝達の二つの側面が見えてくる。

- ① 主題野を形成するさまざまな内容に関する、明示的で記述的な伝達
- ② 主題を原的に創設したある特定の主観の存在の、非明示的で非記述的な伝達

ある主題の伝達において同時に、その主題の存在を支える二つの異なる基盤が受け渡される。第一の存在基盤は主題野を形成する多様な内容であり、それらを現代的に思念する不特定の主観との相関関係のうちにある。第二に、過去のある時点において主題を事実上はじめて設定した特定の主観も、その主題の存在にとってなくてはならない。これがもう一つの存在基盤である。したがっ

て二種類の存在依存は、それぞれ不特定の主観への一般的依存 generic dependence と特定の主観への固定的依存 rigid dependence として捉えられ、またこれらの依存どうしの関係は、必然的な含意関係として理解される。すなわち「恒常的依存は歴史的依存を含意する」のである⁽²⁸⁾。

意味の**堆積**は対象を構成するそのつどの主観への恒常的依存に、意味の**沈澱**は対象を原創設した特定の主観への歴史的依存に、それぞれ対応している。幾何学的な定理のような人類の精神的な遺産（思想）について思考するとき、私はその思想を生み出した精神的父祖の本源的明証に常に連れ戻されるのであり、さらに言えば、その思想を連綿と受け継いできた**私たちの**追行的な明証体験を全面的に引き受けている。私がある思想を真理として思考するということは、人類の地平——この地平を構成する私たちはそれぞれ固有の体験地平を有しているのだが——の末端に私自身の体験地平を位置づけることにほかならない。『危機』書で論じられる理念化の一つの側面は、私の体験において形成される主題から万人に妥当する普遍的思想への上昇である。問題は、この上昇の現象学的な内実ともいえる上述の融合が、いかにして成り立つのかである。

4. 理念化のマテリアリズム ——『幾何学の起源』の言語論

この問題に対する答えは『幾何学の起源』の中にある。「人格に内在的な起源から出発して、いかにして理念的对象性に至るのか」という問いに対して、フッサールは至って明快な答えを与える。すなわち「言語的身体化」によってである、と⁽²⁹⁾。かつて純粋な意味（ノエマ）にとって非本質的であるという理由により議論から排除されたマテリアルな言語記号に対して、新たに、概念的意味（理念的对象）の理解のための超越論的な条件として光が投げかけられるのである⁽³⁰⁾。その際、フッサールは理念的对象の発生史について、言語の関与という観点からまとめ直している。この発生史の端緒に、まず、(i) **想起という主観的な明証化作用**が位置づけられる。続いて想起に基づけられる仕方で、(ii) **共時的、人格的なコミュニケーション**が成り立つのであるが、そのためには他我の想像を可能にする媒体として、マテリアルな言語記号が不可欠とされる。そして最後に、言語記号が個別の対話状況からの独立を果たすことによって、(iii) **理念的对象の世代を超えた共有**が成立する。

「直接間接の人格的話しかけを必要とせずに伝達を可能にすること、いわば潜在的になった伝達であることが、文字に書かれ、記録された言語表現の重要

な機能である。このことによって、人類の共同体化もまたある新しい段階へと高められる。」⁽³¹⁾

言語を意味に寄生する不純物と見なす見解、あるいは言語という物質的な母体から独立に、意味が主観において形成されるという見解は放棄される。代わりに、言語という所与からより高次の理念的对象性が構成されるさまを記述しようとする、発生論的な視点がとられるようになる。この視点に立った場合、言語には、それを発する個々の人格を離れて概念を伝達する自立的な機能が、すなわち意味の乗り物という際立った物質性が認められる。たとえば「虚数」という語を知覚するとき、この言語記号を通してある概念が伝達される。だが伝統的な「ヒュレー・モルフェー」図式にとらわれて、言語記号を単純に意味付与の素材とみなすことは誤りである。おしなべて言語は、共時的・通時的な諸主観——それには当の言語を知覚する私自身も含まれる——を共通の主題的な意味に向けて繋ぎ止める紐帯という、概念的思考にとって不可欠の機能を担っている。フッサールは、〈理念と実在〉や〈意味と物質〉といった固定的な二項対立に揺さぶりをかけ、言語化と理念化という二つの作用の交互規定に注目しているのである。それゆえ、ここで語られる言語の自立性についても、その内実は『論理学研究』において意味に認められた〈状況からの独立性〉とは大きく異なっている。この場合の自立性とはむしろ、言語を媒体とする情報伝達の理念的な無制約性なのであり、非状況性ではなく状況的遍在性なのである。

『イデーニ I』以降、フッサールは、プラトニズムに基づく論理学主義から距離を取り始める。意味の理念性の実質をなすのは非主観性や無時間性ではなく、相互主観性であり「遍時間性 Allzeitlichkeit」なのだ、という洞察が得られたためである⁽³²⁾。ここから『幾何学の起源』の〈言語的転回〉まではあと一步である。ある体験の流れの中で一回的に構成される主題（ノエマ）が、人類というレリバンシー領域において形成される主題（理念的对象）へと高められるためには、空間的な普及と時間的な持続の両側面において意味を支える物質的な基盤が不可欠なのだ。もちろん理念性を有するのはあくまで言語によって担われる意味である。にもかかわらず、主観がおのれの体験を歴史性に向けて拡張するうえで、言語の現前がなくてはならない。それはちょうど、体験的な時間地平が原印象なくして開かれえないのと同様である。意味を欠いた記号は言語たりえず、逆に、言語なくして意味は人類の共有財産として保持されえない。

以上のような理念化の見取り図の中には、そこで言語が果たす二重の機能が示されている。第一に、〈意味の乗り物〉という専ら意味の堆積にかかわる機能である。「虚数」という概念は、「負の数の平方根」という定義か

らより高度な理論に至る多様な意味内容の集積体として、その概念を理解する者によってそのつど構成される。第二に、〈人類の紐帯〉という主に意味の沈澱に関係する機能である。われわれは虚数を理解するたびに、おそらくはカルダーノという特定の人物において生じたであろう、虚数という主題の原初の明証的な創設へと連れ戻される。

虚数という数学的な形相がカルダーノという人物において像を結んだことは、偶然的な事実であり、別の人間によってそれが産出された可能性を想像することができる。にもかかわらず、われわれは、当の人物と結びつけて学ばれる数学的歴史の事実を手掛かりにしてのみ、歴史の全体を通時的、可能的に貫いて沈澱する——したがって事実による拘束を常に凌駕する——意味形象に、まさにそのような存在性格をもった対象に接近するのに相応しい仕方に関与しうるのである。

「書き留められた意味形象はいわば沈澱するのである。しかしそれを読む者はそれを再び明証的にし、明証を蘇生させることができる。」⁽³³⁾

明証の蘇生は、精神的父祖の明証体験へと一足飛びに同化することによってなされるわけではない。沈澱された意味形象への遡行とその明証化は、堆積された意味の諸層を概念のうちに把握することによって達成される。概念という一種の「文化事象」を理解しているということは、その概念が受け継がれてきた「歴史性 Geschichtlichkeit」を意識しているということ⁽³⁴⁾なのである。主観は、歴史において培われた〈われわれ〉の主題として概念を理解する。それによって彼は、自身の明証体験に基礎を置く固有の主題野を、人類の認識可能性を示唆する相互主観的な主題野に向けて解放するのだ。

この主題野は、さしあたり主観にとって慣れ親しまれた個別の文化的世界に重なる。それは体験可能性としての現実がおのれの外部に向けて示唆する「われわれの共同体の開かれた地平」であるが、そこからさらにその「外部地平」が再び示唆される⁽³⁵⁾。さまざまな文化を含み込んで形成されるこの地平が「人類の地平」であり、そこには、各言語にとって伝承可能性のイデーとして働く「普遍的言語」が属している⁽³⁶⁾。個々の言語が普遍的言語というイデーにとっての範例として統握される限りで、相関的に、その言語で語られる主題が万人にとって妥当する理念的対象というイデー的な性格のもとに統握される。ただし、二つの統握は相関的でありながらその関係はあくまで非対称的である。主題について語る普遍的言語は、それじたい主題にならない。主観が理念的対象を主題とするのは、言語を非主題性の様態において〈透視〉することによってであり、言語化と理念化の間の基

づけ関係は逆向きではありえない。

以上のように、地平間の融合が成立するうえで言語記号が決定的な役割を果たしている。注意すべき点は、理念化作用における言語の寄与についてフッサールが考える際、〈意味の乗り物〉や〈人類の紐帯〉という言語の機能は、比喩としてではなく文字通りのマテリアルな水準で理解されるべきであるということである。理念的対象の独立性が確保されるためには、それを蘇生可能な状態で保持する言語記号が不可欠なのであり、また、言語記号の受け渡しなくして理念的対象の通時的な伝播ということも不可能なのである⁽³⁷⁾。

5. おわりに

フッサールは、人類学的な認識活動を歴史性という観点から考察した。学知の対象が普遍の真理であるとすれば、こうした対象に関わる認識を歴史性の相の下に考察することは転倒しているように見える。しかし、フッサールに言わせれば、「最も深く本来の歴史の問題をまさに隠し続けるこのような制限こそが、そもそも根本的に倒錯しているのである」⁽³⁸⁾。ここで言われる本来の歴史とは、それぞれの主観から開かれる理性の歴史であり、その内実は「現在与えられている歴史的な意味形象およびその明証」を「それらの根底にある原的明証という隠蔽された次元にまで引き戻すこと」にはかならない⁽³⁹⁾。このような見方をとるとき「諸科学において、真の歴史的説明の問題は「認識論的」基礎づけないし解明と一致する」⁽⁴⁰⁾。

理性の歴史という認識論的な主題野を拓いたことが『危機』書の成果であったとすれば、この歴史を生きる理性的な意識生に対するマテリアルなものの寄与を明らかにしたことが、『幾何学の起源』の最大の貢献であった。たしかに、言語の記号面にのみ目を奪われていては、意味とそれをおのれの主題として形成する体験的な主題野の間の、相互的な生成の運動は解明されない。そして、この運動が究極において開示する歴史性という領野も隠されたままであろう。しかし他方で、理性の歴史におけるマテリアルなものの寄与を不当に軽視する見方は、体験の世界と理念の世界との無媒介の結合を夢想することによって、無歴史的アプリオリズムを招来することになる。

理念的主題の理解における書字記号の関与を認めることは、事実的な説明様式の前に膝を屈することではない。フッサールの関心は人類の認識活動という歴史的な〈意識〉の運動であり、その志向性の構造なのである。この構造におけるマテリアルなものの積極的な役割を認めることは、理念の普遍妥当性を事実の一般性に解消することではなく、むしろ、そうした二元論の真の克服なので

ある。合理主義の素朴な形態が即自的な理念体を考察の対象とする一方、現象学は理念を構成する意識と、意識に対する理念の与えられ方との間の相関関係を扱う。このような関心のもと、理念的対象の構成におけるマテリアルなものへの超越論的な機能が究明されたのだった。すなわち、人類の地平に歴史性という際立った統一を与える超越論的な機能が、言語に見出されるのである。

注

フッサール著作集からの引用等は、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字にて示す。また『経験と判断』*Erfahrung und Urteil*からの引用等は【EU】の略号とともにページ数をアラビア数字にて示す。

- (1) Ludwig Landgrebe, *Der Weg der Phänomenologie* (Gütersloh: Gerd Mohn, 1963), 165.
- (2) Landgrebe, *Der Weg der Phänomenologie*, 202.
- (3) 本稿の問題設定は、デヴィッド・カーの次の論考に負うところが大きい。Cf. David Cart, *Phenomenology and the Problem of History: A Study of Husserl's Transcendental Philosophy* (Evanston: Northwestern University Press, 1974), 45-67.
- (4) Cf. III/1, 329.
- (5) III/1, 301f.
- (6) Cf. EU, 200-03.
- (7) Cf. EU, 204-14.
- (8) Aron Gurwitsch, *The Field of Consciousness* (Pittsburgh: Duquesne University Press, 1964), 277f.
- (9) EU, 37, 124-36.
- (10) EU, 133, 136-39.
- (11) Cf. Alfred Schutz, *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, M. Natanson (ed.), (Dordrecht: Kluwer, 1990), 207f.
- (12) EU, 195-99.
- (13) EU, 420.
- (14) Gurwitsch, *The Field of Consciousness*, 341.
- (15) Schutz, *The Problem of Social Reality*, 226f.
- (16) Cf. Schutz, *The Problem of Social Reality*, 229. 「世界やそこに在る諸々の対象が自分に対して現れている以外のものであるかもしれない」という疑念(想像力)の停止を、シュッツは「自然的態度のエポケー」と呼ぶ。日常の経験においてこのエポケーは必ずしも自覚的に為されていないが、安定した現実を生きる上で不可欠の能力として働いている。
- (17) EU, 181.
- (18) EU, 183.
- (19) EU, 183f.
- (20) EU, 204f, 303f.
- (21) XVII, 210.
- (22) Amie. L. Thomasson, *Fiction and Metaphysics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), 30.
- (23) Cf. EU, 399.
- (24) VI (*Krisis*) 72.
- (25) VI (*Krisis*) 72f.
- (26) VI (*Krisis*) 256.
- (27) Amie. L. Thomasson, *Fiction and Metaphysics*, 31.
- (28) Ibid. 33.
- (29) VI (*Geometrie*) 369.
- (30) Cf. XIX/1, 30f, 41ff.
- (31) VI (*Geometrie*) 371.
- (32) EU, 309-14.
- (33) VI (*Geometrie*) 371f.
- (34) VI (*Geometrie*) 379.
- (35) VI (*Geometrie*) 369.
- (36) Ibid.
- (37) もちろん、理念的対象そのものが小包のように運ばれるわけではない。即自的な様態で運ばれるのはあくまで言語記号であり、対して理念的対象とは、言語に触発された諸主観によって絶えず新たに明証化されるものなのである。言語の機械的な操作性が理念的対象の明証性に取って代わる傾向をフッサールは「言語の誘惑」と称し、その危険に対して警鐘を鳴らしている (VI (*Geometrie*) 372.)。『危機』書は「理念化」を理念的対象のこうした「即自化」と同義のものと見なしているが、それは理念化という事象の派生的な帰結をクローズアップしているに過ぎない。たしかに、ときとして言語は理念的対象の受け渡しの過程を覆い隠し、それを忘却させるヴェールとして働く。しかし『幾何学の起源』において示唆されるように、まさにその言語という〈物〉が、諸主観の現在の明証体験に理念的対象をもたらす、結果、諸主観をしておのれの体験を超えた歴史的全体性へ赴かしめるのである。
- (38) VI (*Geometrie*) 379.
- (39) VI (*Geometrie*) 381.
- (40) Ibid.

(本論文は「東北哲学会 第64回大会」(2014年10月25-26日、於東北大学)において口頭発表した資料を加筆修正したものである。)

